

保育内容「言葉」を視座としたあかちゃん絵本の研究(一)

柴田 奈美

(要旨)

絵本には、児童文化財としての重要な意義があるが、その文章表現が平易であるために、入念な準備がなされていないなくとも、表面的には子どもたちへの読み聞かせは可能である。そのため、保育実習などの場で、安易に用いられるおそれがある。本研究では、絵本の中でも、特に言語表現の平易な「あかちゃん絵本」^(注1)「りんご」を取り挙げて、表現を分析していくことにより、工夫されている点や主題を考察し、学生に絵本の児童文化財的価値の認識を深めさせることを目標とした。

(キーワード) 赤ちゃん絵本・「主題・構想・叙述」・分析

はじめに

絵本は、児童文化財として重要なものの一つとして、「保育所保育指針」の「保育内容」に取り挙げられている。しかし、絵本の中でもストーリー性のあまりない「赤ちゃん絵本」の場合、深い教材研究や特別な準備をすることなく、いきなり読み聞かせることが可能である。

本研究では、保育内容「言葉」を視座として、学生の絵本に対する認識を深めさせるために、言語表現の分析を精細に行い、主題の考察

を深めさせた。

対象 岡山県立大学短期大学部

平成十三年度入学児童福祉専攻一年生 五十一名

授業題目 「保育内容「言葉」」(一年生後期履修) ねらい

- ① 赤ちゃん絵本を鑑賞させることによって、赤ちゃん絵本の一般的な特色を把握させること。
- ② 絵本の分析方法を示し、独力で絵本の分析をする力をつけること。
- ③ 絵本に対する認識を深めさせること。
- ④ 分析を行う前と後に絵本の読み聞かせをグループ単位で行い、読み方の変化を自他ともに感じ、批評し合うこと。
- ⑤ 絵本への興味・関心を高めさせること。

右のような、五点のねらいをもって試みた授業であるが、ここでは、特に①②の実践結果を中心に報告したい。

一、「赤ちゃん絵本」の一般的な特色

本格的な絵本の言語表現の分析を行わせる前に、三冊の「赤ちゃん絵本」を鑑賞させ、「赤ちゃん絵本」として共通する点を、学生に考察させた。

授業の中で採り上げた絵本三冊は、次の通りである。

「いないいないばあ」(文・松谷みよ子、絵・瀬川康男 童心社
一九六七年)

「のせて のせて」(文・松谷みよ子、絵・東光寺啓 童心社
一九六九年)

「もしもし おでんわ」(文・松谷みよ子、絵・岩崎ちひろ 童
心社 一九七〇年)

これらの絵本を鑑賞させたうえで、「赤ちゃん絵本」として共通する点を学生に考察させた。学生の指摘したことは、次の八点である。

- 一つの文が短く、リズムカルで快いテンポがある。
 - 繰り返しが多く、規則性がある。
 - 直観的にイメージできるように、擬声語・擬態語が使われている。
 - 子どもにとって身近な素材を取り上げている。
 - 登場人物として子どもと動物が使われている場合が多い。
 - 見開き一頁で一場面が構成されている。
 - 画面があたたかな明るい配色となっている。
 - 字も絵もある程度の大きさがあり、はっきりしていて、鑑賞しやすい。
- これらに、次の三点を付け加え、赤ちゃん絵本の考察のまとめをした。
- 同じような言葉の繰り返しの中で、少しずつ表現に変化をもたせ、単調にならないようにする言語表現上の配慮のあること。
 - 同じ言葉の繰り返しで単調になりやすい面を、登場人物をだんだん増やしたり、登場する動物の大きさをだんだん大きくしたりすることによって、ムードを盛り上げていく工夫をしていること。
 - 一文が簡潔で場面も少ないため、一気に読み聞かせることも可

能であるが、一場面一場面をしっかりと子どもに見せて、絵本には書かれていない問いかけを保育者が子どもにし(あるいは子どもから保育者に問いかけて)、絵本を媒介としたコミュニケーションをはかることができること。

二、赤ちゃん絵本「りんご」の分析

絵本を考察していくうえで、言語的表現により着目させるために、「主題」「構想」「叙述」「内容」を整理させて、分析させた。

次に、絵本「りんご」の文章表現を、場面ごとに記しておく。

- ① りんご
あかい りんご
まるい りんご
- ② りんご
きいろい りんご
まるい りんご
- ③ りんご
ピンクの りんご
まるい りんご
- ④ りんご
りんご
- ⑤ りんご
あかい りんご

かわを むいて

きいろい りんご

かわを むいて

ピンクの りんご

かわを むいて

⑥ しろい りんご

りんご

りんご

⑦ りんご きって

しんを とって

⑧ りんご

いっばい

⑨ ああ おいしい

右のような、六場面で構成されている絵本『りんご』の学生の主題の捉え方は、大部分は次のような内容であった。

(1) りんごにはいろいろな色があるが、皮をむけば同じ色であること。切って形が変わっても、りんごであること。

(2) りんごという食べ物に興味を持ち、山盛りにされたりんごを、みんなで食べる喜び。

(3) 右の(1)をさらに普遍化させて、物(人)にはいろいろな特徴があるし、さまざまな見方が

ある。

とまとめられた学生が一名いた。

主題は個人によって捉え方が多少異なっていて当然である。各自の意見を総合し、さらに深い捉え方のできている学生の意見を特別に取り挙げることによって、その他の学生に刺激を与えることができる。

「構想」は、まとめ方が難しいようであったので、この場合は三つに分けることにすると助言を与え、考えさせた。その結果は左のとおりである。

I 三種類のりんごの紹介(①～④)

II りんごの皮をむいて、切って、食べられるようにするまでの過程(⑤～⑦)

III 山盛りに盛りつけられたりんごを眺める楽しさと、それをみんなで食べる喜び(⑧～⑨)

美しいおいしそうな色のりんごが提示されるが、皮を剥くと白色に変身し、さらに切ることによって形が変化していく。このように興味を抱かせるように発展し、最後に、にこやかな顔で母親と子どもたちが、りんごを十分に食べている様子で、気分を盛り上げて終わっている。

短い流れの中にも、工夫のされた構想の窺えることを、学生たちに確認させた。

「叙述」については、学生たちは次のような指摘をしていた。

○ 「りんご」の繰り返しで、りんごを印象つけている。

○ 「きって」「とって」と簡潔な表現を重ね、リズムカルである。

○ 「ああ おいしい」と、満ち足りた気持ちを窺わせる「おいしい」という言葉に、「ああ」という感嘆詞をつけた表現であり、気分を盛り上げている。

初読の読みでは、指摘できた点は右の三点にとどまる。

さらに、その三点をもとに、叙述面での工夫を考察させていった。まず、「りんご」の繰り返しの点では、「あかい」「きいろい」

「ピンクの」)と変化している部分があるものの、それらと対になっている表現は、すべて「まるい りんご」であることに気づかせた。色という視点からは異っていても、形という視点からは全てまるい。相違点と共通点が、構想Iの部分では描かれていたのだということに気づかせた。

また、りんごの色の選び方も、「あかい」の次に「あおい」ではなく、「いろ」という言葉の必要な「きいろい」を選んでいる点、「ももいろ」ではなく、カタカナ表記となる「ピンクの」を選んでいる点を指摘し、表現に変化をもたせている工夫に気づかせた。そして、⑤の場面では、既に表現されていた「あかい りんご」「きいろい りんご」「ピンクの りんご」とともに、「かわを むいて」という新しい表現を繰り返し用いて、対句的表現として指摘した。既知の表現に、新しい表現を付け加え、それを繰り返すことにより、言葉の獲得をねらっているのである。続く⑥の場面では、皮を剥かれたりんごが三つ大きく描かれて、「しろい りんご」「りんご」「りんご」と、「りんご」が強調されている。「りんご」はまるいりんごという共通点をもつとともに、皮を剥けばその実の色は全て「しろ」であるという共通点ももつ。それが、「しろい」の繰り返しではなく、三つの皮を剥かれたりんごを見開きに描くことにより、印象的に表現している。次に、「きって」「とって」という表現について。⑤の場面で用いられた「(かわを) むいて」という(動詞) + 「て」という表現が、動詞の種類を変化させて繰り返されているのである。しかも、「きって」「とって」と促音便を用いたもので、それが歯切れのよいリズム感を生んでいる。このリズムが、⑧の場面で「りんご いっぱい」に続き、最後の「ああ おいしい」の山場に気分を盛り上げていっている。「りんご たくさん」といった表現と比較してみることにし、その点が明確に感じとれる。

最後の「ああ おいしい」については、学生の指摘した通りであろう。知識的な要素の多かった文脈の途中に、母がりんごの皮を剥き、

長く垂れた皮をもて遊ぶ子どもの姿を描いたり、大皿に盛られた白いりんごを、期待に目を輝かせながら見つめる二人の子どもを描くことにより、叙情性は鑑賞者に伝わってきてはいたが、最後のこの簡潔な「ああ おいしい」に、おいしく実ったりんごを、やさしい母親に剥いてもらって、母と二人の兄弟で食べる楽しい気分が満ちている。

さらに、奥付けの上部に、「青森りんご」と書かれたりんごの箱のふたが半ば空けられて、中にまだ赤いりんごの残っている絵が描かれている。明日もまたおやつにりんごを切ってもらうのか、それともジュースにするのか、田舎のおじいさん、おばあさんから送られてきたのか：など楽しく想像できる。

三、反省と今後の課題

以上のような叙述の工夫点の補足をしたうえで、赤ちゃん絵本のよいうな短い絵本の読み聞かせをする場合、どのようなことを大切に思っただかという点を中心に、自由に感想を書かせた。次に、学生の感想(抄出)を示したい。

① 「あかい」とか「まるい」とか色を表す言葉は、特に強調して読む。ゆっくり丁寧に、最後の「ああ おいしい」のところは、本当においしそうな顔と声で表現する。

(小寺 恵理子)

② 対になっている表現が続いているが、単調にならないように、「あかいりんご」は強さを感じられるように、「きいろいりんご」はやさしさを、「ピンクのりんご」はかわいらしさが感じられるように読みたい。「りんご りんご りんご」は気持ちを含め、だんだん声が大きくなるように読む。促音便のところは、そのリズムカルな効果を最大限に活かせるように読む。

(井上 美穂)

③ 色の変化に合わせて、読み方に気をつける。「いっぱい」「ああ

おいしい」などは本当に見て、食べているように読む。声の大きさや速さなどにも気をつけて読む。

(船本 綾)

④ 子どもたちが絵を十分に楽しみつつ聞いてくれるように、ページをゆっくりめくる。絵本に隠されている大切なことを伝えられるように、心を込めて読む。

(岡田 早耶香)

⑤ 「あかい」「きいろい」「ピンクの」など他との相違点にアクトをおき、「りんご」など何度も出てくる共通な言葉は、ゆっくりと子どもの目を見て読む。

(岡部 高子)

ほとんどの学生は、「りんご」の絵本に表現された簡潔な文章表現に込められた作者の意図を理解し、それが効果的に伝えられるような読み方の工夫を、自分なりに具体的に書くことができた。

「主題」「構想」「叙述」に分けて、単語のレベルまで詳しく分析させることによって、その絵本に対する理解が深まる。その理解の深まりが、読み方にまで影響を与えることが、右の感想文から期待できる。今後の課題は、ストーリー性のある絵本の分析を行える力をつけていくことと、分析力を土台として、実際に読み聞かせの技術を高めていくことである。

(注)

(1) 松野正子(文)・鎌田暢子(絵)『りんご』童心社 一九八四年一月

(2) このことについては、「保育内容「言葉」を視座とした絵本の研究」(岡山県立大学短期大学部研究紀要 第四卷)平成九年三月)においても述べた。

(3) 注(1)と同じ。

引用・参考文献

- 岡田明編『子どもと言葉』萌文書林 二〇〇〇年三月改訂版
- 本吉圓子『子どもの育ちと保育者のかかわり』萌文書林 一九九一年
- 今井和子『ことばの中の子どもたち』童心社 一九八六年
- 柴田奈美『子どもの言葉と児童文学』大学教育出版 一九九六年

二〇〇一年 十月三十一日受付
 二〇〇一年十二月二十五日受理